

第9回新潟食道・胃癌研究会

日時 平成19年11月10日(土)
午後2時～
会場 新潟ユニゾンプラザ
4階 大会議室

I. 一般演題

1 乳癌原発の転移性食道癌の1例

坂本 薫・小杉 伸一・松本 淳
神田 達夫・畠山 勝義
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科

症例は58歳、女性。主訴は嚥下障害。高度進行乳癌に対し、術前化学療法施行後、2004年乳房切除術を行い、術後化学療法中であった。2007年6月頃より嚥下困難を自覚し、食道造影にて、食道[Mt]に狭窄を認め、同年7月精査目的に当科入院となった。内視鏡所見では、切歯列より32cmに全周性狭窄を認め、ファイバーの通過は不可であったが、粘膜面に異常なく、生検にて悪性所見を認めなかった。CTにて中部食道に全周性の壁肥厚と、左胸水の貯留を認め、PETにて食道腫瘍部及び左胸水部に集積を認めた。胸水穿刺にて、以前の乳癌と同様の病理学的所見を認め、乳癌原発の転移性食道癌と診断した。治療として、化学療法・タキソール®を行い無効であったが、ナベルピン®投与にて、臨床症状及び画像所見共に著明な改善を認めた。乳癌原発の転移性食道癌は非常に稀であり、また本例は化学療法が有効であった、興味深い症例と思われ報告した。

2 腹腔鏡下食道切除術(VATS-E)の工夫と成績

— 導入から5年を経て —

桑原 史郎・片柳 憲雄・狩俣 弘幸
野上 仁・横山 直行・山崎 俊幸
大谷 哲也・斉藤 英樹

新潟市民病院外科

【目的・方法】当科では2002年10月よりVATS-Eを導入し現在までに53例に施行した。これまでに行ってきたVATS-E施行時の工夫と臨床成績をVATS-E導入直前までの開胸食道切除群と比較検討した。

【結果】

現在までの工夫：

現在の適応はT3N2までである。肺の術野への侵入の克服のため手術台のrotateをした。気管の圧迫に対し気管鉤(11例目)、ユニベントチューブによる分離肺換気(15例目)を順次導入していった。さらに2モニター画面とし、45度斜視鏡を用いるようにした(19例目)。また、組織の繊細な把持のための腹腔鏡用鑷子を導入した。手技は30例程度でほぼ定型化された。手術時間、出血量からみた明らかな習熟曲線は認められなかったが、これは導入当初は容易な症例から開始し、順次適応を拡張したためと考えている。VATS-Eの成績：

VATS-E群(n=53)、開胸群(n=41)の胸部操作時間、出血量、縦隔郭清リンパ節個数の中央値は210 vs 129min (p<0.05), 110 vs 192ml (p<0.05), 16 vs 13個(N.S.)であった。また、人工呼吸機管理は1 vs 2日(N.S.)、再挿管は3例(6%) vs 8例(19%) (p<0.05)であり、術後肺合併症、反回神経麻痺、術後入院期間は7(13%) vs 17例(41%) (p<0.05), 18(34%) vs 10例(24%) (N.S.), 20 vs 25日 (p<0.05)であった。R0症例(n=50)のうち11例に再発(血行性6例、頸部リンパ節3例、縦隔リンパ節1例、他1例)を認め、このうち4例が原病死した(観察期間中央値388日)。

【結語】種々の工夫を加えながらVATS-Eを53例に施行した。VATS-Eの臨床成績は多くの